

The world's educational system seen through my eyes

第4回

“国際派大和撫子”が伝える世界の教育現場

西浦みどりの「大学の窓から」



国立大学法人山口大学客員教授(国際関係・コミュニケーション)、国際コンサルタント・評論家(オピニオンリーダー)。東京生まれ、英国育ち。英国王立音楽院で学び、卒業後ソプラノ歌手として活躍したが帰国後引退。1986年より総理府のインタビュアーとして政府広報に携わる。その後、インバスターリレーションズと都市開発のコンサルティング会社設立。
http://www.nishiuramidori.com

UCL①

UCLこと、ユニバーシティ・オブ・コレッジ・ロンドンを紹介する。英国でも、ケンブリッジ、オックスフォード大学にならんで、G5スーパーエリート大学のひとつとして認知されているばかりか、世界でもトップ30にランクインしているほど、アカデミズムの高さを誇る。この大学の特徴は、一八二六年の設立当時から「平等」をモットーに唱えたことだ。

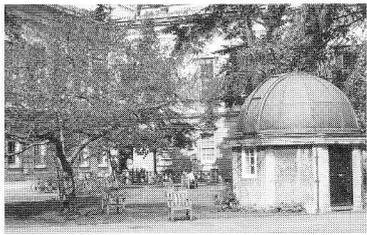
十九世紀初頭の大英帝国といえ、階級社会・既得権益主義全盛の世である。当時のオックスフォード、ケンブリッジ大学といえ、アングリカン(イギリス国教徒)信者(カトリック信者公爵家は別)で、男性貴族であることが入学条件だった。



ジェレミー・ベンサム

そんな中、UCLの「建学の父」といわれた哲学者のジェレミー・ベンサムが、すべての人に開かれた高等教育機関創設を強く推し進め、その結果、イギリス初の開かれた大学が、UCLとして誕生した。平等を基準とし、イギリスで初めて女性の入学を許可し、様々な宗教、人種、政治的思想による差別を徹底して排除したのである。

現代では、「それがどうしたの?」くらいにしか受け留められないと思うが、当時としては奇跡、奇想天外、あり得ないこと、といって



も過言でない。何しろ、淑女は紳士の前で気絶するのが美德とされ、フランス人は料理人、イタリア人は給仕といった具合に、とんでもない人種職種差別が当たり前のこととしてまかり通っていた時代なのである。まさに革命的な出来事であったに違いない。

ところで、日本人が初めて海外で学んだのは、UCLだ。彼らは、「長州ファイブ」の中の三人で、一八六三年、当時ご法度だった諸藩士海外渡航にもかかわらず、死を覚悟で渡英した。UCLと日本の関わりは、それ以降も深いものとなる。筆者が客員教授を務めている国立大学法人山口大学とUCLが昨年、大学間学術交流協定を締結した。

次号は、両大学の相互理念などについて記述する。